テキストマイニングによる被災体験学（Disaster Experience Research）への混合研究法アプローチ

死に関する表現と心的外傷後成長（PTG）

いとうたけひこ　所員／現代人間学部教授

1 ── 問題

（1）当事者の経験の学としての苦労体験学

「NPO 法人健康と病いの語りディペックス・ジャパン」の佐藤（佐久間）[1] は、オックスフォード大学の Health Experience Institute から構想を得て、2014 年夏のシンポジウムをふまえて、「患者体験学」（Health Experience Research）の創設を展望した。また、井上[2] は、「東北の声」の映像音声記録から、被災者の中でも職業的援助者、ボランティア援助者、そのほか合計 3 つのカテゴリーに分けて、援助者セラピー原則に着目して、「援助体験学」（Helper Experience Research）の提案を行ない、研究対象を非被災者にも広げつつある。本論文は、井上と同じく東北被災者の体験についてのナラティブを研究対象としてナラティブアプローチによる「被災体験学」（Disaster Experience Research）の構築をめざすはじめての試みである。

ナラティブアプローチによる「患者体験学」、「援助体験学」、「被災体験学」をつらぬく共通性は何であろうか？　いとうはそれを、「苦労」であるとし、3 つの体験学を総称して「苦労体験学」（Suffering Experience Research）と呼ぶことを 2014 年 8 月 28 日に和光大学で開催された「語りに基づく被災体験学の講演とシンポジウム」で提案した。「苦労」という表現は、生きていく上での困難を「苦労」ととらえ、それを自分のものとして取り戻すことが重要であるとする、精神

1）佐藤（佐久間）りか（2015）「患者体験学（Health Experience Research）の実践──生命予後告知のあり方を巡って～「健康と病いの語り」のデータから」『東西南北 2015』和光大学総合文化研究所年報, 134-144.

2）井上孝代（2015）「東北被災者における援助体験学（Helper experience research）──援助者セラピー原則（Helper therapy principle: HTP）に着目して」『東西南北 2015』和光大学総合文化研究所年報, 117-133.

看護学におけるタイダルモデル[3]、および浦河べてるの家における精神障害者の当事者研究[4]の思想に依拠している。

Lieblich[5]は前稿で、NPOイスラエイドの『東北の声』プロジェクトによって収集されたインタビュー記録[6]のいくつかを基に心的外傷後成長研究におけるナラティブアプローチの有効性を論じた。本論文ではナラティブアプローチに加え、テキストマイニングと質的研究の組み合わせによる混合研究法のアプローチが有効であるかどうかを、東日本大震災の被災者の体験記録を対象に検証したい。

なお、東日本大震災の被災者の物語りにおける心的外傷後成長（PTG）の存在は、これまでの量的研究では、中川・いとう[7]がPTGI-J尺度の検討を行ない,尾崎・小野寺・いとう[8]および小野寺・尾崎・いとう[9]では楽観主義との関係の検討がされてきた。また、いとう[10]は質的な方法で、被災者の語りを分析することにより、「探求の語り」がPTGにつながっていく可能性を論じている。

（2）テキストマイニングを用いた混合研究法（ミックス法）

本研究では、テキストマイニングの手法により、東日本大震災の被災者の体験の分析を試みる。テキストマイニングとは、小平・伊藤・松上他[11]が説明する

3）・Barker, P., & Buchanan-Barker, P.(2005) *The tidal model: A guide for mental health professionals*. New York:Routledge.
・Barker, P., & Buchanan-Barker, P.(2007) *The tidal model: Mental health, reclamation and recovery*. Unpublished manual.
・Barker, P., & Buchanan-Barker, P.(2008) *Tidal Model*（http://www.tidal-model.com/）
の３つの資料がある。なお、日本での紹介に以下の文献がある。
いとうたけひこ・小平朋江・穴澤海彦・井上孝代（2010）「タイダルモデルと浦河べてるの家――英国と北海道から生まれた精神障害者のためのコミュニティ的人間関係援助」『和光大学現代人間学部紀要』3, 197-207. 和光大学リポジトリで取得可能。https://wako.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_i d=1499&item_no=1&page_id=13&block_id=55

4）当事者研究の文献は数多いが、コンパクトなものとして以下の書籍がある。
向谷地生良・浦河べてるの家（2006）『安心して絶望できる人生』日本放送出版協会.

5）Lieblich, A.（いとうたけひこ･山崎和佳子訳）（2015）「心的外傷後成長（PTG）研究におけるナラティブ・アプローチ――苦労体験学（Suffering Experience Research）に向けて」『東西南北 2015』和光大学総合文化研究所年報, 088-103.

6）http://voicesoftohoku.org/ の動画サイトでインタビューをいくつか公開している。なお、Lieblich（2015）と井上（2015）と本研究の対象者の語りの一部もここで視聴することができる。

7）中川拓・いとうたけひこ（2012）「東日本大震災２ヶ月後の大学生のトラウマ後の成長――日本語版外傷後成長尺度（PTGI-J）の因子構造の検討」『日本応用心理学会第79回大会発表論文集』, 100.

8）尾崎真奈美・小野寺哲夫・いとうたけひこ（2012）「東日本大震災におけるPTG（心的外傷後の成長）研究（1）――怒り、絶望、無力感とともにある成長」『日本心理学会第76回大会論文集』, 349.

9）小野寺哲夫・尾崎真奈美・いとうたけひこ（2012）「東日本大震災におけるPTG（心的外傷後成長）に関する研究Ⅱ――セリグマンがいう楽観的帰属スタイルの人は、震災体験によるPTG(心的外傷後成長)が大きいのか？」『日本心理学会第76回大会論文集』, 350.

10）いとうたけひこ（2012）「東日本大震災についての語り」尾崎真奈美（編）『ポジティブ心理学再考』, ナカニシヤ出版, 1-9.

11）小平朋江・伊藤武彦・松上伸丈・佐々木　彩（2007）「テキストマイニングによるビデオ教材の分析――精神障害者への偏見低減教育のアカウンタビリティ向上をめざして」『マクロ・カウンセリング研究』, 6, 16-31.

ように、文字データという質的なデータを、統計的に分析するという、質的研究と量的研究の両方をあわせもった性質がある。混合研究法（mixed methods research）とは質的方法と量的方法の両方を統合的に1つの研究に用いる研究法である[12]。いとう[13]は、テキストマイニングは、量的研究と併用しても、質的研究と併用しても、いずれも混合研究法を構成すると位置づけている。テキストマイニングを用いた混合研究法の先行研究としては、主に質的研究と併用されている。

たとえば、西野・いとうは大学生の質問紙調査の自由記述部分[14]と子どもの作文[15]から東日本大震災後の心的外傷後成長（PTG）を検討した。また、Ito & Iijima[16]は小中高生徒の作文集をテキストマイニングと質的研究による混合研究法により分析して、PTGの5因子[17]の内容が有ることを確認した。またIto[18]は、同じデータを用いて、津波被害と原発被害が子どもたちの作文における時間的展望へ与えた影響をテキストマイニングとその語りの内容の分析により明らかにしている。

本研究では国際NPOイスラエイドのインタビュー記録のアーカイブである『東北の声』プロジェクトの被災者のインタビューを対象にして質的分析と量的分析とをミックスした混合研究法による分析の試みを紹介したい[19]。

12）Creswell, J. W. (2014). *A concise introduction to mixed methods research.* Sageを参照のこと。混合研究法は、日本においては、看護学、社会調査、家庭医学、健康科学、などの分野で、紹介されている。また、2015年には、日本混合研究法学会も発足する予定になっている。

13）いとうたけひこ（2013）「テキストマイニングの看護研究における活用」, **46(5)**, 475-484.

14）西野美佐子・いとうたけひこ（2013）「東日本震災を体験した大学生の文章のテキストマイニング——基本的自尊感情（共感的自己肯定感）と心的外傷後成長（PTG）に焦点を当てて」『東北福祉大学大学院紀要』, 10, 45-63.

15）西野美佐子・いとうたけひこ（2014）「児童作文における心的外傷後成長（PTG）とレジリエンス——テキストマイニングによる居場所、時間的展望、自己肯定感の研究」『日本発達心理学会第25回大会発表論文集』, 423.

16）Ito, T., & Iijima, Y.(2013). "Posttraumatic growth in essays by children affected by the March 11 Earthquake Disaster in Japan: A text mining Study." *Journal of International Society of Life Information Science*, **31**, 67-72.

17）Tedeschi, R.G & Calhoun, L. G. (1996). "The Posttraumatic growth Inventory: Measuring the positive legacy of trauma." *Journal of Traumatic Stress*, **9**, 455-471.

18）Ito, T, (2014) "Effects of tsunami and nuclear disaster on children's time perspective: A text mining study of essays after the Great East Japan Earthquake." *Journal of International Society of Life Information Science*, **32**, 44-46.

19）『東北の声』の語りの中にPTGの5因子があるかどうかについては、現在、井上・いとう（2014）で発表した結果をとりまとめているところである。また、同じデータを用いて、和光大学学生の下条照世とナラティブにおける死に関する表現について共同研究（下条は卒業論文として）を行なっている。本論文では、ナラティブアプローチとテキストマイニングとの混合研究法によるアプローチにより、これまで得られた知見を、下条の許可を得て報告する。なお、データ部分を中心に下条（2014）として公開が予定されている。

・井上孝代・いとうたけひこ（2014）「東日本大震災の被災者の語りの特徴——『東北の声』における心的外傷後成長（Posttraumatic Growth:PTG）」第21回多文化間精神医学会学術総会.

・下条照世（2014）「『東北の声』のテキストマイニング分析——死に関する表現の有無を手がかりにして」, 2014年度VMStudio & TMStudio学生研究奨励賞　結果発表のページ. http://www.msi.co.jp/tmstudio/stu14result.html（2015年1月31日取得）

2 —— 目的

本研究の目的は、東日本大震災の被災者のインタビューを対象にして、語りの各事例において、①死について言及しているかどうかの有無を見出し、②震災が人々にどのような影響をもたらしたかの特徴をテキストマイニングの手法を用いて明らかにすることである。

(1) 分析対象

NPO「日本イスラエイド（IsraAID)」による被災体験アーカイブ作成のための『東北の声』プロジェクトで得られた、200 名以上のインタビューの内、宮城県の亘理町、山元町、石巻市の 3 地域からの、14 組 15 人（男性 8 人、女性 7 人）の面接映像を対象にした。なお、この対象は次の井上・いとう論稿[20]で分析されている内容と同一である。

(2) 分析手順

分析手順としては、『東北の声』プロジェクトで得られた面接映像を基に文字データに転記されテキストファイル化されたものを、Microsoft Office Excel により、テキストマイニング用にタブ区切り（TCV）データを作成して Text Mining Studio5.0 に読み込ませた。

テキストマイニングによる分析は（1）基本情報、(2) 単語頻度解析、(3) 係り受け頻度解析、(4) 特徴語分析、(5) 原文における「死」についての語りの分析の順に行なった。

3 —— 結果

(1) 基本統計量

14 事例から得られたテキストの基本的な情報では、1 事例あたりの文字数は平均 3606.8 であり、総文数は 1927 文で 1 文当たりの平均文字数は 26.2 であった。また、内容語の延べ単語数は 20647 であり、単語種別数は 4673 であった。タイプ・トークン比[21]は、0.226 であった。

(2) 単語頻度解析

単語頻度解析とは、テキストに出現する単語の出現回数をカウントすることに

---

20) 井上孝代・いとうたけひこ（2014)「東日本大震災の被災者の語りの特徴——『東北の声』における心的外傷後成長（Posttraumatic Growth:PTG)」第 21 回多文化間精神医学会学術総会.

21) タイプ・トークン比とは、単語種別数（タイプ）を延べ単語数（トークン）で割った値である。

よる分析である。ここから、『東北の声』に特有の表現（に登場した単語）を明らかにできる。

1．名詞

「それ」という単語は「私」という単語と比べ、死について言及無しの人たちの方が頻度が低かった。「私」と言う単語は死について言及無しの人たちが一番単語頻度が高かった。次に、「人」の単語は「それ」よりも死について言及無しの人たちに多くみられた（図1）。

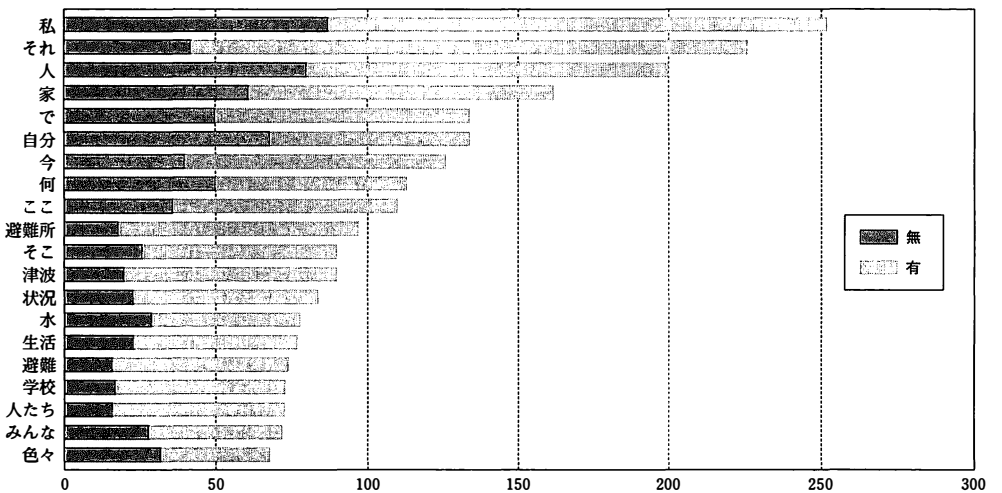
2．動詞

「いる」という単語は「来る」という単語と比べ、死について言及無しの人たちが僅かに多いことが読み取れる。「やる」と言う単語は「行く」という単語と単語頻度が僅差であることがみられた。次に、「作る」の単語は死について言及無しの人たちに一番少なくみられた（図2）。

3．形容詞

全データでは、最も多用された形容詞は「良い」（87単語、以下略）であり、「すごい」(70)、「寒い」(27)、「多い」(20)、「大きい」(20)、「早い」(17)、「強い」(16)、「辛い」(16)、「高い」(15)、「長い」(15)、「明るい」(15)、「欲しい」(15)、「若い」(13)、「悪い」(12)、「小さい」(12)、「嬉しい」(9)、「悲しい」(8)、「暗い」(8)、「楽しい」(8)、「近い」(8)、「少ない」(8)、「無い」(8)、「有

図1　死について言及している有無「名詞」単語頻度解析（上位20単語）



り難い」(8) であった。

図3は、上位23の単語を横棒グラフで表したものである。1番目にある「良い」が（死生観有り45）（死生観無し42）『東北の声』のキーワードで、最も多

図2　死について言及している有無「動詞」単語頻度解析（上位20単語）

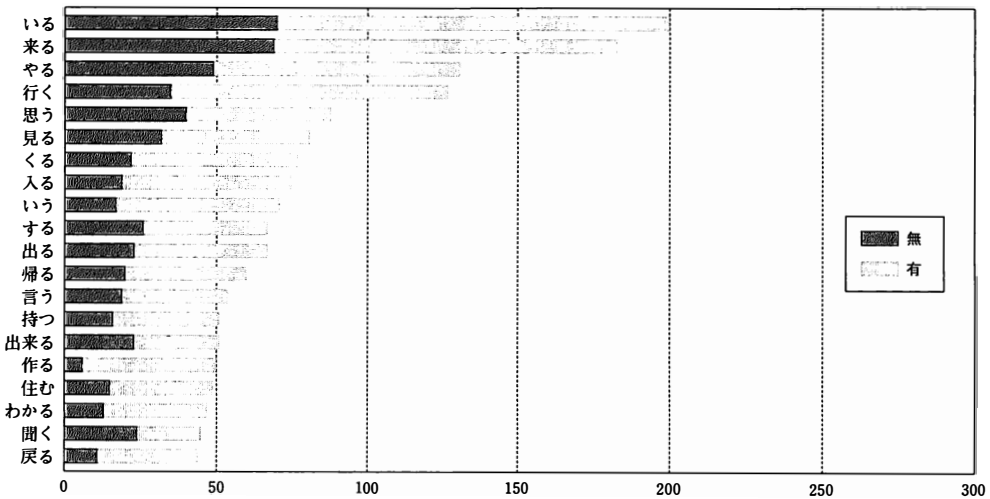
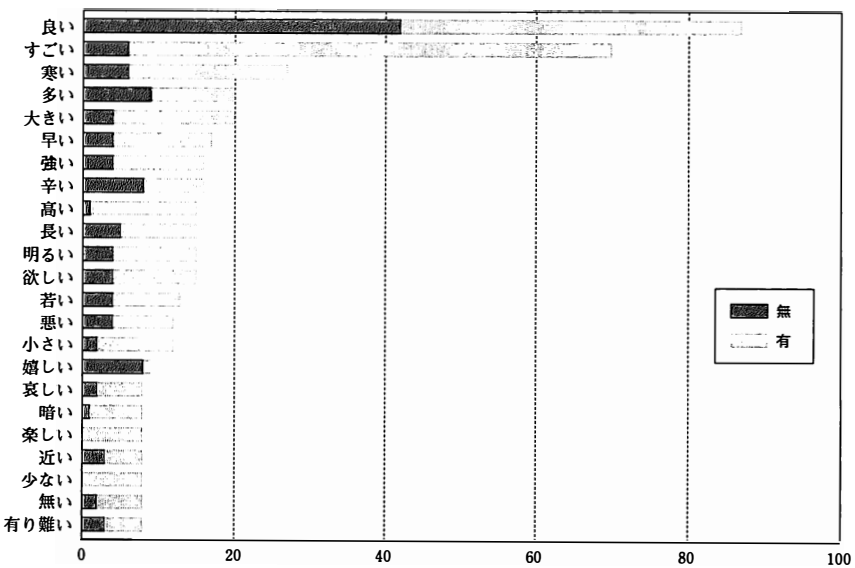


図3　死について言及している有無「形容詞」単語頻度解析（上位23単語）



く出現し、それに次いで「すごい」（死生観有り 64）（死生観無し 6）、そして「寒い」（死生観有り 21）（死生観無し 6）と続いていた。「有り難い」（死生観有り 5）（死生観無し 3）という単語も上位 23 以内に入ったことから、震災が起こった中でも感謝の気持ちを持てていたということが読み取れる。

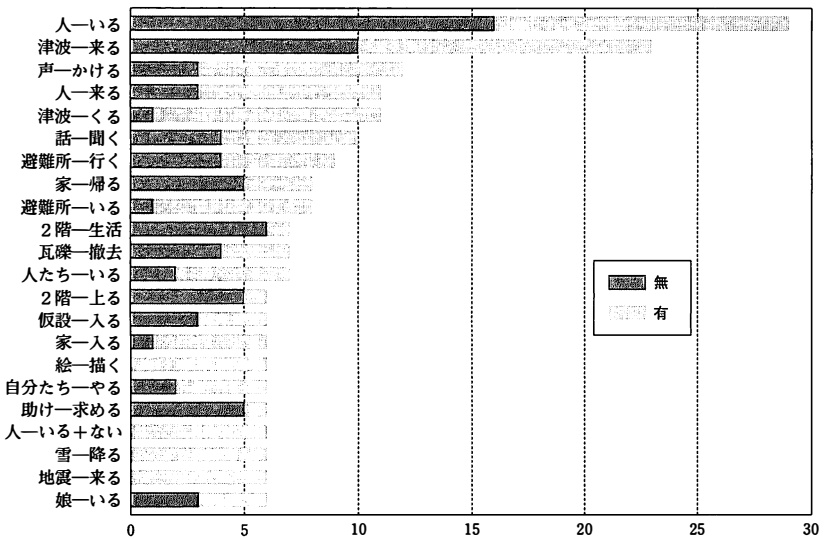
「すごい」という単語は「良い」という単語と比べ、死について言及有りの人たちの方が圧倒的に単語頻度が高いとあった。「良い」と言う単語も死について言及有りの人たちの方が単語頻度が高かったが割合としては「すごい」の単語に比べ死について言及有無の極端な差は見られなかった。

（3）係り受け頻度解析

係り受け頻度解析とは、テキストに出現する係り受け表現の出現回数をカウントすることによる分析である。図 4 は単語の中で、どの単語との係り受けが多いのかを係り受け頻度分析を行なって横棒グラフにして死生観の有無を表したものである。横軸の数値は係り受け関係にある単語の出現項数を表している。

1 番目にある「人ーいる」が最も多く、（死生観有り 13）（死生観無し 16　以下略）の計（29）であった。次に、「津波ー来る」（有 13）（無 10）計（23）、「声ーかける」（有 9）（無 3）計（12）、「人ー来る」（有 8）（無 3）計（11）、「津波ーくる」（有 10）（無 1）計（11）、「話ー聞く」（有 6）（無 4）計（10）、「避難所ー行く」（有 5）（無 4）計（9）、「家ー帰る」（有 3）（無 5）計（8）、「避難所ーい

図4　死について言及している有無、係り受け頻度解析



る」（有 7）（無 1）計（8)、「2 階ー生活」（有 1）（無 6）計（7)、「瓦礫ー撤去」（有 3）（無 4）計（7)、「人たちーいる」（有 5）（無 2）計（7)、「2 階ー上る」（有 1）（無 5）計（6)、「仮設ー入る」（有 3）（無 3）計（6)、「家ー入る」（有 5）（無 1）計（6)、「絵ー描く」（有 6）（無 0）計（6)、「自分たちーやる」（有 4）（無 2）計（6)、「助けー求める」（有 1）（無 5）計（6)、「人ーいる＋ない」（有 6）（無 0）計（6)、「雪ー降る」（有 6）（無 0）計（6)、「地震ー来る」（有 6）（無 0）計（6)、「娘ーいる」（有 3）（無 3）計（6）といった係り受け表現が見られた。

（4）原文における「死」についての語り

14 組中 10 人に死についての語りがあることを、テキストマイニングソフトの原文参照機能を使って見出し、それぞれの内容を検討した。以下にまず、該当部分を抜粋する。

1．S.M.さん（アートの持つ力）

二度目の津波が来るとわかった際に、「死ぬとしても自分だけだ、私が死んでも夫が残れば大丈夫だな、両方死んだら可愛そうだけど夫は大丈夫だな」という気持ちがあった。外にでると「頑張れ宮城！」というばかりで「私は生きているだけで頑張っているのに、これ以上何を頑張ればいいの……」という気持ち。避難所にいるときは「しんどいです、3 人行方不明で 2 人亡くなって」という話を聞いても涙も出ないし、私はこんなに冷たい人間だったのかなって、そんなふうに思っていたりしていたが、絵本制作のため訪れた荒浜で被災者の話を聞いた際、とても辛かった、話している途中で具合が悪くなったり、帰ってきてから頭が痛くなったりしたため、1 人に聞いたら 3 日くらい休んで聞く体勢を整えてから聞きに行くなどの工夫をしていた。今後は絵本制作などを通して震災の状況を伝えることが今自分に出来ることであれば（やっていきたい)。それをしないと辛い。

2．I. I.さんと I.S.さん（うつが治って不幸中の幸い）

自宅 2 階で震災にあい、津波に巻き込まれたが幸い瓦の屋根ではなく、トタンだったためバラバラにならず死なずにすんだことや、お巡りさんに津波がくると教わった 10 秒か 15 秒後には津波が家に着いていたためその 10 秒、15 秒の差で命が助かったことを考えると、ラッキーというか運が良かったなあと思った。6 メートル、10 メートルという数字がとなり町のスピーカーから聞こえてきて多分我々は助からないと思っていた。当日は救助されず、夜には雪も降りものすごく寒かったため多分命はないなと思っていた。本当にいろんな人が援助してくれるため日本に生まれて本当に良かったなと思った。逆に言うと楽しかった、人の優しさにはものすごく触れたと感じた。

３．C.Y.さん（家族の離散と再会）

女房が海の方のスーパーに買い物に行っていた際、津波に遭い運転中に水が入ってきてしまった。たまたまあいていた空家の２階で一晩過ごした際に寒いし、もうだらだらだし空き家だから何もなくてたまたまプラスチックのごみ袋がありそれに足を入れて体をさすり凍えないようにした。「生きなくちゃ生きなくちゃって、死にたくない」とそればっかりで一晩過ごしてなんとかかんとか自分で朝を待った。そして自身の息子が遺体で見つかった。そのことを山形にいる母親に伝えると、夜になると 86 歳になる母の枕元に孫が出て眠れないんだって。霊感っていうのかな。夜の 12 時頃に待ち合わせをして母親を会わせに行ってそれでやっと落ち着いたっていう。

４．M.M.さん（鎮魂と復興への記録集づくり）

もうなってしまったことはしょうがないんだから、っていうとあんたは被災してないんだからって言われるかもしれないけれど、それはそれで仕方のないことだから、生きてる以上は前を向いて進んでいかなければなと思います。そしてみんなに生きてて欲しいし、元気になってほしいと思う。だから私もみんなと一緒に頑張りたいと思っています。

５．W.S.さん（中学校長＝避難所責任者として）

校長として避難所を手配していたが、地域の人で周りも 7〜8 人亡くなった人たちもいるし、生徒も 4 人ほど亡くなって。4 人亡くなった思いとかは友達とかクラスメイトでいたと考えると非常に心に整理がつかなかったですかね。その後は毎日同じ生活を繰り返すことの大事さが身に染みてわかるんですよ。山元町で亡くなった約 700 名も、きっと亡くなった人たちも今日生活したいと思っていたはずなんですね。そういうことを考えたら私は私なりに一生懸命生きてそういう人たちの気持ちを伝えていかなければならないという役割を担っているのではないかなと思っています。ですから皆で力を合わせて山元町の復興のためにも頑張っていきたいなっていうふうに思っています。

６．T.H.さん（中学校教師　学校と地域とのつながりの再確認）

震災は凄く悲しい出来事でした。いまだに引きずっていることですとかいまだに夜になると思い起こすこととかはいっぱいあるんですけど、それと同じくらい、いろんな人の励ましとか、優しさとか温かい想いに触れることができたので、それがあるからこそなんか、前に進めるかなっていうふうに思えます。だから、ある想いを持ったけれども震災で絶えてしまった人生とか、想いを持った人たちの分まで頑張っていかなきゃいけないのかなっていう想

いでこれからの一日一日を重ねていきたいなっていうふうに思います。

7．K.T.さん（NPO法人蛤浜再生プロジェクト）

（身重の）妻が自分の実家で、母親と祖父母と4人とも、津波で亡くなりまして。もう最初はてっきり浜にいるものだと思っていたんですけれど、まあいなかったので、もうひたすら探しに出て、見つかったのは結局3週間後くらいに、遺体安置所で見つけたんですけれどもまあそれで1人で住むのも学校も被災していましたので、自分の生活もままならない感じでしたので。実家に戻って浜からは1年離れていましたね。生徒も大半が被災して、親が亡くなったり、家が無いっていう生徒が多かったんですよね。震災の時も色々なものを奪われたんですけれども、やっぱり色々な方に助けて頂いて、改めて人の繋がりと人の有り難さっていうのは本当に感じまして。

8．H.S.さん（コンビニと地域の復興への思い）

今回の津波によって父が亡くなりました。1時間以上水に浸かりっぱなしだったのでうちの父はそれで低体温症で亡くなってしまいました。私の目の前で。結局逃げた物置の屋根の上から娘と妻がずっと見ているわけですよ。2人は私たち2人を見ていて、たぶんあの2人が一番辛い思いをしていると思う。目の前で祖父が死んでいくのを見ているから、最初の内は娘もうちの妻も私たちが殺したと言ってたんですよ。助けてあげられなかったって。

9．S.K.さん（父の死と母の死）

父親がリビングのところで溺死していた。ソファーに横にして亡くなっていたっていう報告を聞いてその時はまだ「えーそうなの？　うーん。信じられない」っていう状況で、それから病気で危篤状態の母親に言うかどうかで悩み、母親に父親が亡くなったことを伝えると「えぇ！」っとだけしか言わなかった。次の日の朝に母親の元へ行くと母親は亡くなっていた。思ったのは、母親は温かい病院で亡くなってよかったなって、父親は冷たいところで亡くなって、申し訳なかったなって思ったんですけど、でも他の方はまだ遺体がみつからない状況でとか、それに比べればうちは恵まれているほうって感じました。

10．O.A.さん（消防士としての体験）

まさかあれくらい大きな津波が来るとは思っていなかったため、自分の心に隙も実際ありました。目の前に津波が見えましたので動揺もありましたし、ここで自分の一生が終わるのかなとも思いました。私の義理の兄も、お父さん、お母さん、私の近い親戚2人も津波で行方不明という情報がすぐ入って

きましたので、当然私個人としてはその方の捜索、探しに行きたいという気持ちが当然ありますよね、しかし、仕事は地域住民のための仕事ですのでそこに行けない。個人的に義理の兄の捜索も行けない、本当に近しい親戚の人を探しに行けないという無念さがたしかにありましたけれど、でも仕事柄しょうがないですよね。無事数日後に遺体で見つかったんですけども、それはよかったのかなと思いますけども、そういう時消防としての災害に対して働くのが私たち消防の使命ですので、それはいたしかたがないことかなと割り切って仕事はしましたけれど、若干心残り、探してやりたいなという心残りはありました。

4 ── 考察

(1)「東北の声」の語りにおける死の言及とPTG

本研究では、被災者の語りにおいて、死について言及しているかどうかの有無を見出し、震災が人々にどのような影響をもたらしたかの特徴をテキストマイニングの手法を用いて明らかにすることを目的としていた。「良い」という表現は、死についての語りの有無にかかわらず出現したように、死について語っている場合でもその人に「良い」というポジティブな単語が抽出された。被災をしたとしても悪いことだけではなく、自身にとって良い方向へ向かう心的外傷後の成長が有ることが示唆された。

また、行方不明になった後、遺体で見つかった事に対し遺体が見つからない人に比べ、恵まれているといえるといった思いやりに基づくポジティブな感情を抱いていることが見えてきた。震災のつらい出来事を表現して肉親や親しい人の死の持つ意味を再構成する傾向が見られた。これは、トラウマを乗り越えて成長する姿（PTG）を示唆する内容であった。

人々の語りは地震で被災する前と後では命の大切さや生きることの意味について色々な人の励ましや、優しさ、温かい想いに触れることができたことで前に進もうとする感情がでてきて、被災をしたことをネガティブにだけでなく、ポジティブにも捉えられるようになった例が多かったと言えよう。

(2) 援助者セラピー原則と死の語りの比較

井上[22]は『東北の声』の語りにおける援助者セラピー原則（HTP）について検討している。援助者セラピー原則とは、①援助する人はより自立的になる、②似た問題を抱える人の援助をすることで、距離を置いて自分の問題を考えることが

22）井上孝代（2015)「東北被災者における援助体験学（Helper experience research）──援助者セラピー原則（Helper therapy principle: HTP）に着目して」『東西南北 2015』和光大学総合文化研究所年報, 117-133.

できる、③援助の役割を持つことにより社会的有用性の感覚が得られるという利点がある。本研究では死の語りがあるかどうかに着目した。井上の分類によれば、職業的援助者の場合、死の語りを語っていたのは6人中3人であった。ボランティア援助者に関しては、4人中3人であった。非援助者に関しては、4人中4人であった。これらの死を語った者も人数割合を見てみると、職業的援助者、ボランティア援助者、非援助者の中で非援助者の人数割合が一番高い。これに対して職業的援助者は身近な死については語らない人も半数近くいるということが分析できた。男女別で仕分けると男性8人中7人、女性7人中3人が死について語っている。女性のほうが死について語ることが少ない傾向にあると言える。

職業的援助者は自分の責務を全うすることにより、自己効力感が高まるという傾向も見られた。ボランティア援助者の語りでは、震災前と震災後で今まで気づけなかったことに気づくことができ、震災がきっかけで今まで関わりのなかった人とのつながりができたというケースが多く、トラウマ的な経験を越えて新しい自分の発見を行なっている。非援助者の被災者の語りでは被災をしてものすごく大変な思いをしたけれど、人と話すことによりポジティブに考えられたり、うつ状態を克服したことや、生まれた土地であるためこれからも住み続けたいという地域につながりを求めるということが明らかになった。

(3) 被災体験学の構築に向けて

被災の体験は、一人一人異なっておりそれぞれの独自の物語りによりその意味も再構成される。そのような物語りは、Lieblich[23] も指摘しているように「語り、文書、散文、詩、ドラマ、美術作品、ときには踊り」など多様である。今回取り上げた「東北の声」はインタビューの録画であり、話し言葉の音声だけではなく、表情や仕草なども見ることができる、新しい形での「語り」である。このような記録化は、さまざまな場所で蓄積されている。フィリピンの2014年12月の季節外れの台風が来たとき、前回7000人の死者・行方不明者の教訓を活かして、死者は一桁台であったことが報道されている。人間は被災体験とその語りから教訓を学ぶことができる。そしてそれは、ネガティブな教訓の継承だけではなく、苦難の中での、人間のすばらしさを引き継いでいくことも重要な側面である。被災の記録を継承し、次の時代に新たな意味を付与していくこともアーカイブの重要な役割である。「東北の声」の参加者の人々が、研究目的での利用を快く了承してくださったおかげで、我々はさまざまなことを学び取ることができるのである。

---

23) Lieblich, A（いとうたけひこ・山崎和佳子訳）(2015)「心的外傷後成長（PTG）研究におけるナラティブ・アプローチ――苦労体験学（Suffering Experience Research）に向けて」『東西南北 2015』和光大学総合文化研究所年報, 088-103.

(4) テキストマイニングを用いた混合研究法の有効性について

本研究は、単語や共起関係を量的にカウントするテキストマイニングの手法と、語りの意味的な世界へのナラティブアプローチを統合する試みを行なった。死についての言及のある場合と無い場合での表現の違いが明らかになった。また、PTG の証拠を探す際にもポジティブな内容の単語が役立つことも示唆された。単語表現の有無やその位置を瞬時に検索できる点で、テキストマイニングは量的分析という側面だけでなく、質的分析のための検索装置としても役立つことが明らかである。このような検索機能（＝原文参照機能）は、質的分析が中心の研究の場合でも大いに有用であろうと思われる。

テキストマイニングは、質的な資料である文字データを対象にして、量的な分析方法である（多変量解析を含む）統計的分析を行なっていくという手法である。いとう[24]の指摘するように、質的方法とのコンビネーションはきわめて有効である。とともに、テキストマイニングには限界もある。たとえば「『水平社宣言』テキストのパラドクス」のように言外の意味を分析することが苦手である。ナラティブアプローチなど質的研究とテキストマイニングとを上手に統合することにより、より充実した被災体験学が構築されるだろう。

(5) 本研究の限界と今後の課題

15 人（14 組）と対象のデータが少ない制約の上で混合研究法によるアプローチを試みたが、量的分析と質的分析の統合が成功したとは言えない。しかしながら、死の表現を手がかりにしながら前向きに生きている姿や死と瀬戸際の経験をしたからこそ自ら見出せた価値観と行動、すなわち PTG を明らかにすることができた。

［伊藤武彦］

24）いとうたけひこ（2013）「テキストマイニングの看護研究における活用」『看護研究』, 46(5), 475-484.